アジアの小国を知る

英語授業を通して

神戸市立科学技術高等学校
加藤　修一

実践教科　　自由選択科目（リーディング）
時間数　　６時間
対象学年　　２年生
対象人数　　３５人

１．実践の目的

(1)日常なじみのない開発途上国やその国の人々についての理解を深める。日本国内では一般的にはあまり「外国」を意識しない。アジアといえば、中国か韓国、または北朝鮮を思い浮かべる。しかし、もちろん、それ以外の国でも案外日本と関係が深いところもあるのである。日本が属するアジアの小国にも目を向けさせ、いかに深い結びつきがあるか、認識させたい。

(2)本校は工業高校であり、英語が嫌いな生徒が少なくない。さらに、外国事情に興味を持っている生徒はさらに少なくなる。彼らにとって外国といえば、日本となじみのある国、つまり、アメリカ合衆国やイギリスぐらいしか思い出さないようである。そこで、日本ではあまり知られていない国を知るための活動を行った。

(3)スリランカとその国の人々に関する資料(日本文・英文)を活用し、生徒の語彙力と読む力(情報を得る力)を高める。リーディングの授業なので、主として「読む」ことによる情報収集・整理を第一の目標とした。

(4)英語話者の人口についていうと、もはや、ネイティブ・スピーカーよりもノンネイティブ・スピーカーの方が多くなっている。英語が英語のネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションだけに使われるのではなく、英語を第二言語や外国語とするノンネイティブ・スピーカーとのコミュニケーションに使われることが多いことを認識させる。その一例として、スリランカ人が話す英語を聞き、その内容を把握させる。さらには、日本人が話す英語も通じるのだということを認識することが、スピーキング能力向上のための努力につながる。

２．授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
１時限 **スリランカの現在の様子を知る。①** スリランカを生徒に紹介	初めに、アジア地図でスリランカの位置を確認し、次にインドとの比較をする。	地図(プリント)

し、理解への足がかりとする。	スリランカ政府とタミール人武装勢力間の内戦状態を報じた、雑誌と新聞の記事を読む。	AERA No.44 2006年9月18日号52-53p「内戦逆戻りのスリランカ」 毎日新聞9月16日「子供兵士の犠牲拡大」
２時限 **スリランカの歴史・様々な分野の知識について学ぶ。** 歴史や地理・言語・宗教などの概要について学ぶ。	スリランカ歴史についての英語を読み、クイズを解いていく。	“*Sri Lanka*”(プリント) “Sri Lankaってどんな国？”(プリント)
３時限 **スリランカの現在の問題点について学ぶ。** スリランカの民族間紛争について知る。	政府軍とタミール人武装組織間の紛争について書かれた英語を読む。	“Sri Lanka: Stories from conflict zones”(プリント)
４時限 **スリランカの現在の様子を知る。②** 写真を見て、具体的なイメージを持つ。 **スリランカの人の英語を聞く。** いろいろな英語を聞く。	写真とそれに付された英語の説明を読み、現在のスリランカの様子を視覚的に認識する。 大学の若い教師に対するインタビューを聞く。	現地で撮影した写真 現地で撮影したビデオ
５時限 **フォトランゲージ** 写真を見て感じたことを表現する。	写真を見て、感じたことや考えたことを日本語で書き表す。その後で英語でも表現する。	現地で撮影した写真
６時限 **まとめ** スリランカについて読んだり、見たりしたことをまとめる。 開発途上国と日本との関係について、自分なりの考えを書く。	５時間でスリランカについて学んだり、考えたことを資料を使ってまとめる。 「スリランカと日本が今後仲良く付き合っていくには、どうしたらよいと思うか。」について書く。	A4判作文用紙1枚ずつ

３．授業の詳細

１時限　スリランカの現在の様子を知る。①

高等学校の地理ではスリランカについてはほとんど触れていないので、生徒は予備知識

を持たない。そこで、今日本の新聞や雑誌などで扱われている内容を糸口とした。我々が滞在した八月上旬以降、スリランカ政府軍とタミール人武装組織「タミール・イーラム解放のトラ」（LTTE）との間の民族紛争が激化し、LTTE 側の遠隔コントロール地雷による無差別テロや政府軍航空機による爆撃の双方の応酬に至っている。それほどにならないと日本のメディアは報道しない。偶々見つけた記事であったが、子供が兵隊にされているという話は、生徒には少なからず影響を与えた様子であった。

この国の場所については、初めはアジアの中で位置づけ、日本との比較をした。

２時限　スリランカの歴史・様々な分野の知識について学ぶ。

スリランカの様々な範囲に及ぶ概要について学習した。まず、簡単な歴史について学習した。インターネット上の BBC のウェブサイトの南アジア版を見ると、スリランカについての情報が得られる。そこで得た英語の情報を本校の ALT に生徒が読みやすいように書き換えてもらった物を教材として使用した。

また、地理・言語・宗教や幼児死亡率や平均寿命などの統計数量などについて、クイズを解き日本と比較しながら、知識を増やしていった。こちらは、書籍の『地球の歩き方』やインターネットの CIA のウェブサイトから”THE WORLD FACTBOOK”を参考にして、英語で作成した。生徒は英語を読むことによって、様々な表現を学ぶことができる。

３時限　スリランカの現在の問題点について学ぶ。

導入部でスリランカ政府軍と LTTE との武力衝突についての記事を扱ったが、詳しい内容は本時において学習した。日本においてはスリランカの内戦状態がくわしく報じられることはないが、ヨーロッパではスリランカでの平和問題を注視しているようである。インターネット上の BBC のウェブサイトの南アジア版では、スリランカの日常の戦況の変化を報じている。その中で、南インドに近い北部の半島の都市ジャフナや事実上の首都であるコロンボでのレポートである”Sri Lanka: Stories from conflict zones”を教材として使用した。それも ALT によって、生徒用に読みやすく適当な量の英文に書き換えてもらった。

４時限　スリランカの現在の様子を知る。②　　スリランカの人の英語を聞く。

今までは、英語を読むことによってスリランカの現在の情勢について学習してきたが、本時は、私が現地で撮影した写真を見せ、写真の後に付けた説明を生徒が読むことによって、スリランカの現在の様子を示した。写真の内容としては、町の様子、村の様子、大学での人的、資金的両面での日本からの援助、スラム街での日本人村落調整員の仕事ぶり、訪れた学校での歓迎の様子、２００４年の津波で被害を受けた漁村の様子など彼らに見せたいものは尽きない。

後半は、実際にインタビューをして採取した、スリランカの人が話す英語を聞かせ、内容を把握させた。録音状況が悪く、それ自体聞き取り難かったので、教材としてはあまりよいものとは言えなかった。しかし、あえて聞き取りをさせたのは、英語を母語としない話者の英語を聞くという体験をさせたかったからだ。実際、生徒が聞き取ることができたのはほんの一部だったのだが、それにもかかわらず英語を母語とする話者とは異なるアクセントや発音、使用語彙などを経験することは得難い経験だと考える。『英語の話者は現在、

世界に２０億人いるともいわれるという。しかし、そのうち英語を話者とする、いわゆるネイティブスピーカーはわずか３億人。「公用語」として英語を使う人が１０億人、そしてそれ以外の、「外国語」として英語を学ぶ人が７億人、という割合になっている』(「BERD」2006 No.05 p23、Benesse 教育研究開発センター)という理由からだ。だとすれば、様々な種類の英語に大量に接することによって、大多数が英語を勉強することが嫌いな工業高校の生徒が自信を持って、日本人の英語を話す努力をすることにつながるのではないかと、考えるのである。

５時限　フォトランゲージ

自分が撮影したり、他の参加者からいただいた写真の中から４枚を選び、Ｂ４判に印刷し、ラミネートをして体裁を整えた。クラスを５ないし６人のグループに分け、グループに４枚の写真を配布した。各自好きな写真を選び、その写真から自分たちが気づいたことや考えたことを自由に表現するように指示。初めは日本語で書き、その後和英辞典を使用するなどして英語に訳した。生徒が書いた英語は、文法や語彙使用などの点で正しくないものもあったが、英作文の練習はあまりしていないので仕方がないと思う。ただ、自分の知識を総動員して、辞書の助けを借りて英語を書けたのはこちらの期待以上だった。

選んだ絵でもっとも多かったのは「象の水浴び」の写真で、やはりスリランカ的な物に興味を持ったのだろう。そこから、象と観光客との触れ合いということを考えた生徒が多かった。

「地雷探索」「自動車とスリーウィーラー」「二人の小学生の少女」の写真はほぼ同数で、これは予想外であった。「地雷を駆除した跡の穴」や「オート三輪は小回りがきき、価格も低価格で、タクシーとして普及した」ことを指摘したり、真剣なまなざしで勉強している二人の少女に感心したり、学校の設備が貧しいと考えたりしている。

６時限　まとめ

生徒は今までスリランカについて学んだり、写真を見てイメージを膨らましてきた。そこで、自分なりのスリランカのイメージを日本語でまとめさせた。生徒が学習した資料を使いながら､自分の頭の中で作り上げてきたスリランカのイメージがどんなものであるか、我々教師側も興味津々である。歴史、地理、民族など様々なカテゴリーにおいて頭の中でまとめたものを日本語で書かせた。

さらに、「スリランカと日本が今後仲良く付き合っていくには、どうしたらよいと思うか。」について日本語で書かせた。生徒たちは、どの国も一国だけで成り立っていけるのではなく、他国との付き合いの中で発展していくのであることを実感したようだ。スリランカにおける、日本の人的、経済的援助の重要性も認識しているようだ。

(生徒の作文から抜粋)

・停戦の仲介に力を入れ、スリランカが一刻も早く平和になるように努めることも重要である。
・例えば、日本は医療が大変進歩しています。医療技術を教えたり、また工業的技術など現地に行って、その人々のために提示すべきだと思います。
・日本の人々の場合は、僕らが楽しく過ごしている間に、スリランカの人々は自爆テロな

どの犠牲になったり、子供は兵にさせられているといった問題に興味を持たないといけない。

・スリランカが自ら技術者を育てられるように学校を作るのも良いと思う。学校ができたら先生が必要になるし、そうなるとスリランカの人の仕事の幅もまた増えると思う。

・ここ最近の授業で、スリランカのことを学び、セイロンティーはスリランカの茶葉なのだと知りました。日本の人は、ぼくのように、セイロンティーという言葉は見知っているけど、原産がスリランカだと知らない人は多いように思います。しかし、スリランカではＪＩＣＡなどの活躍があり、日本は好かれているように思います。

・日本とスリランカの国際交流として互いに留学生を受け入れる。例えば、スリランカからは技術を学びに日本へ来て、日本は今でも行っているように技術を提供し、教えに行ったりすること、高校生を対象とした交流会を開いたり、両方の国を知らない各々の国の人たちのために特産物や工業製品などの展示会を開いたりする。

・これまでと同じようにスリランカをいろいろな面から支援し続け、スリランカが成長できるように技術を教えたり、子供たちが勉強しやすいように鉛筆や消しゴム、ノートなどを買うお金を寄付で集め、学校に物品を送ったりすれば、日本とスリランカの関係は良くなると思います。

・わたしは、ビデオでもあったようにスリランカの大学生を日本の援助で、日本に留学できるようにしてあげれたらいいなと感じました。日本で学びたいと思っている人は大勢いるようだし、寄付した機器より何倍も新しい機器が日本にはあるからです。そして、スリランカの学生には、スリランカのことをもっと多く話してもらったり、伝統を披露してもらいます。

・まずお互いのことを知るということから始めないといけないと思う。僕はこの授業を受ける前まではスリランカという国を名前ぐらいしか知らなかった。僕がもしこの授業を受けていなければ、たぶんスリランカという国を知ることはなかったと思う。やっぱりそのことを知っているのと知らないのではかなり変わってくると思う。

・まとめると、お金だけの援助だとすぐにその関係は消えてしまうと思うから、人の思いとか行動とかで我々が動ける援助になったら、スリランカとの国際交流が深まっていくことになると思います。

・大学間などでも、英語で話す交流の場を増やすなどすると、また関係は深まると思う。

４．成果と課題

スリランカに行く前にはそんなにはっきりとした計画があったわけではない。私自身海外生活の経験が無く、旅行も短期間で２回だけしか行っていない。自分が生徒に開発途上国のことを教えられるのか、という不安定感を抱いていた。実際スリランカに行ってもわずか７日間である。果たしてどの程度まで生徒にスリランカのイメージを持たせることができるのか。持たせたイメージが偏っていないか。授業の前の思いは尽きない。

全体的に外国語学習に対する意欲が低い生徒が多いなかで、リーディング選択の生徒は誠実に、前向きに課題に取り組む姿勢が見られた。外国語学習のモチベーション向上の要因として、外国の文化や言語、風俗などの総合的な現象に対する興味・関心が挙げられる。機能重視の英語教育観の昨今であるが、英語の情報を通して、スリランカの事情を少しで